

○ ワークショップ「企業倫理学における CSR および CC 概念」

開催責任者 外国語学部 加藤泰史

2009年7月11、12日

南山大学名古屋キャンパス J棟特別合同研究室

ワークショップは2日間にわたり、「企業倫理学における CSR および CC 概念」のテーマのもと、参加者12名、以下のとおり開催された。

◇報告者及び題目

- | | |
|--|----------------------|
| 小林道太郎（愛知県立大学非常勤講師） | 「企業の CSR 推進のために」 |
| 岩佐宣明（愛知県立大学非常勤講師） | 「日本的経営と倫理」 |
| 高野一彦（名古屋商科大学） | 「CSR 経営と企業倫理」 |
| 杉本俊介（京都大学大学院） | 「アルバート・Z・カーの論証の検討」 |
| 小山巖也（関東学院大学）、谷口勇仁（北海道大学） | 「企業におけるソーシャルイシューの認識」 |
| 齋藤善成（前パイオニア CSR 統括室）、山中裕（三菱ケミカル HD 内部統制推進室）、
小山巖也（関東学院大学） | 「CSR 担当者の挫折と思い」 |
| 中澤武（早稲田大学非常勤講師） | 「時間政策とその目的」 |

◇ワークショップの討論内容

小林の発表では、CSR の推進のためにはそれが経営陣だけでなく全社的な取り組みとして従業員レベルにまで浸透する必要があるとされ、CSR 活動を QC などの小集団活動と結び付ける可能性が提案された。岩佐は、伝統的な日本の経営のスタイルのなかにみられる倫理意識の分析から、その延長としての日本的な CSR 経営の可能性を論じた。杉本は、企業倫理にかんする現代英米圏の議論を背景に、「ビジネスはゲームである」とするカーの提言を多角的に分析・批判した。高野は法学者の観点から、近年の法改正や判例が企業に求めているのは自律的な自己牽制機能だとし、それに応じたコンプライアンス体制の確立が必要であると主張した。中澤は厚生労働省の推進するワークライフバランス政策からその意義と目的を取り出し、特に家族政策と関連付けられたドイツの時間政策との対比を行った。小山・谷口は雪印の二度の不祥事について、特に最初の事件の後に取られた対策を分析することによってそこで生じた視野狭窄を確認し、そのことが次の事件を防止できなかった原因につながった可能性を指摘した。齋藤・山中・小山は CSR を実際に企業内で先頭に立って推進した経験から、その経緯と思惑を紹介するとともに今後の課題について論じ

た。これらの発表はいずれも企業の倫理と CSR の現状を踏まえた分析を与えるものであり、今後の企業倫理の理論的展開および企業における実践との関わりに向けて、それぞれの立場や視点からの討論が交わされた。

◇研究成果発表

今回のワークショップを踏まえて研究を重ねた成果を 2010 年 3 月にデュッセルドルフで開催するビジネスエシックスシンポジウムで発表し、さらにドイツ応用倫理学研究会で発行する雑誌に掲載する予定である。